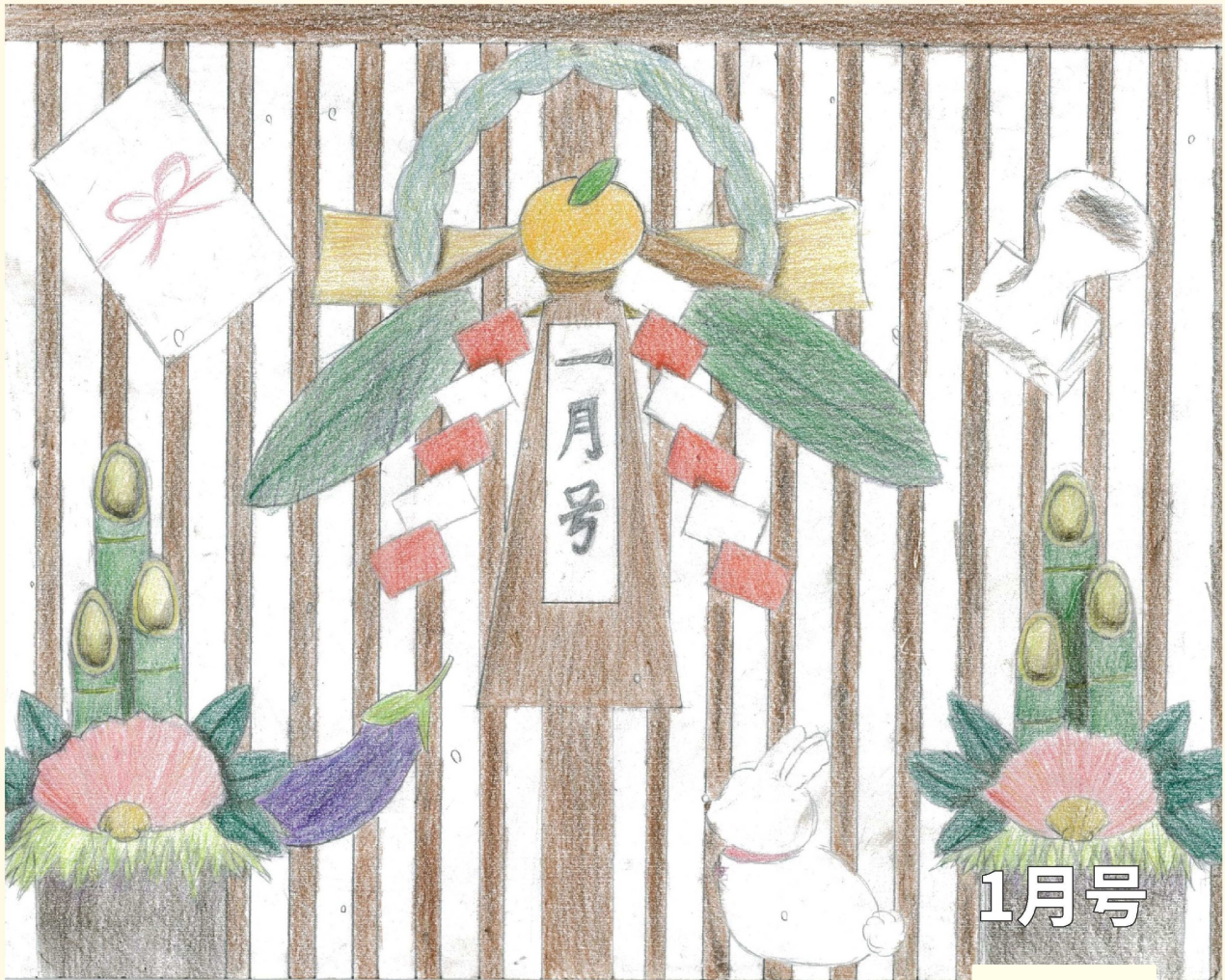


こくりにゆうだよ



大阪府立池田高等学校

「もうすぐ引退なので、悔いのない作品を作りたいです。」



今後のイベント情報

※場所の記載がないものはとよなか国際交流センターで開催します。



中国・韓国・ベトナムの

旧正月のつどい

2月8日(金)

13:00~15:00

中国・韓国・ベトナムの旧正月を祝いながら、日本での暮らしを話し情報を交換する。

対象:中国・韓国・ベトナムにルーツのある人とその家族、興味のある外国人

参加費:500円(小学生以下無料)

哲学カフェ

「立ち止まるのはなんで？」

2月9日(土)

10:30~12:30

カフェフィロ・川崎唯史さんの進行で、「立ち止まるのはなんで？」について話し合う。

定員:12名(申込先着順)

参加費:無料

申込:来館・電話受付。

外国人のための

確定申告相談会

2月22日(金)

13:30~16:00

税理士による①確定申告の説明会(13:30~14:15)②個別相談会(14:30~16:00)。英語・中国語・韓国・朝鮮語、フィリピン語、タイ語、スペイン語、ベトナム語、ネパール語の通訳あり。

対象:就学前の子どもをもつ外国人

参加費:無料(要申込・先着20名)

申込:来館・電話受付。

11月17日（土） 多文化フェスティバル を開催しました！！

11月17日（土）10時30分から15時まで、とよなか国際交流センターおよび男女共同参画推進センター「すてっぷ」のホールにて、第14回多文化フェスティバルを開催し、総勢240人をこえる参加がありました。多文化フェスティバルとは、在日、帰国、渡日など様々な外国にルーツを持つ子どもたちやその友だち、一緒に頑張っている先生たち、国際に関心を持つ人たちが出会い・つながる場を作ることを目的とした年に1度のイベントです。



今回のフェスティバルは、参加者には「謎の黒い集団のボスの本当の名前を解き明かす」という大きなミッションが与えられ、外国にルーツをもつ子どもや若者や関係団体によるブースを回ってヒントをもらおう…という内容で進められました。今年はオープニングに外国にルーツをもつ子どもの歌の発表のあと、「コムセマリ（三匹の熊）」という韓国の歌を参加全員で踊って楽しみました。

外国にルーツを持つ子どもたちや、活動に関わるボランティアや先生たちによるブース出展では、韓国の折り紙、ミサンガ作り、ドイツのコマ回し、中国のハンカチ回しや世界の民族衣装・楽器体験、缶詰みゲーム、プチ外国語レッスン、バルーンアート体験、外国にルーツをもつ高校生による母国紹介などがあり、お昼にふるまわれたルーマニア料理はミートボールやポテトサラダなど、子どもたちの大好きなメニューで大好評でした。

エンディングセレモニーでは、ネパールの高校生によるラップ、外国にルーツをもつ子どものダンス発表があり、謎解きミッションの解答では名探偵コナンに扮した事務局長が登場し、会場は笑いに包まれました。最後はビンゴ大会をして大盛り上がり、大盛況のうち閉会することができました。

ルーツ（外国籍）教員研究会によるシンポジウム

公立学校の外国籍教員 ～歴史的経緯と諸外国事例の交差から～

12月2日、外国籍（ルーツ）教員研究会ととよなか国際交流協会の共催で、シンポジウム「公立学校の外国籍教員～歴史的経緯と諸外国事例の交差から～」を開催し、85名が参加されました。

日本人と同じように教員免許を持ち採用試験に合格しても、正式な「教諭」ではなく「期限を付さない常勤講師」で採用される外国籍教員の実態解明とその課題の明確化に向けて、2012年から7年間にわたって研究してきた成果発表の場をもちました。会場（とよなか国際交流センター）は、外国籍教員当事者やこの課題に不条理を感じ運動を進めてきた人や教育行政の人など、関心のある人々でぎっしりと埋まり、開始前から熱気あふれる状態でした。

シンポジウムは、第Ⅰ部「『期限を付さない常勤講師』の成立過程と各地の動き」と題して日韓政府間交渉の経緯と結果について説明と、外国籍教員の任用をめぐる東京・大阪をはじめ各地の動きが解説されました。歴史的な経緯が解明されると同時に、国家間の約束事の影響で各地の教育行政が縛られている実情が浮かび上がりました。第Ⅱ部では、「諸外国における外国籍教員の任用・雇用の類型と背景」についての報告がなされ、参加者は興味深く聞き入っていました。

最後に、研究会の代表である中島智子さんが、「当初は外国籍教員の問題に疑問を抱いていた研究だったが、この7年間の研究をすすめる中で、その奥深さを感じるとともにこの現状と課題を広く多くの人に知らせることの大切さを感じてきました。」と述べられました。シンポジウムは活気ある議論とともにそれぞれに持ちかえる課題を提供することで幕を閉じました。



協会常務理事・金相文より報告



中島智子さんからの説明



会場は満員になりました

「貧困を救えない国日本」

阿部彩／鈴木大介著（PHP新書）



所得による教育格差を許容する（「当然だ」＋「やむをえない」）保護者の割合は、ある2018年調査によると623%に上る。10年前と比べて、その割合は18%以上増えている。子どもの7人に1人が相対的貧困にある中で、この数字を前に沈黙考ぜざるをえない。自己責任論が闊歩する日本社会にあって、教育格差を許容する主流の人々に届く言葉はあるのか。

本書は貧困問題の「論者」と「ルポライター」が本音で語り尽くした対談だ。解決のためには、社会全体で「痛み」ともなった増税が不可欠とする。一方で支援者側にも、例えば学習支援活動は勉強の苦手な子どもを過度な競争と選別の秩序に放り込むだけではないか、と切り返す。万能の処方箋はない。読者はこの問題の深淵を垣間見ることになるだろう。

（協会評議員・宋 悟）

＼Youは何しに国流へ？／ 第15回 センターで活動している人を紹介します☆

テレビやネットなど、メディアとのつきあい方を考える「メディア・リテラシー」に取り組んでいます。国流へはたしか2000年頃、市民講座のお手伝いでうかがったのが最初です。何か発表をしたのですが、学生だった頃は参加者の皆さんの前でとても緊張したことを覚えています。それから長い間、メディア・リテラシー講座でお世話になっています（今年も開催します！ぜひ来てください！）。

2012年からは「てーげー部」に参加しています。メディアから一方的に押し付けられる「ハーフ」「クォーター」のイメージにとらわれない、自分たちの発信を、という思いから始まった映像制作活動です。

これまで数本の作品をつくり、イベントに参加したりしてきました。これからのいい意味で「てーげー」（適当）な雰囲気大切に、気軽に参加できる表現活動の場であればと思っています。



メディアリテラシー講座 講師
たじま ともゆき
田島 智之さん

2018年度 メディアリテラシー講座 開催決定！
開催日：2019年3月中旬～下旬（未定）
詳細は広報とよなか・おしらせ2月号にて告知します。

コラム **이모저모** 通信 イモヂョモ

韓国映画「共犯者たち」と「自白」 そして、「1987」（第2回）

ファンボカンチャ
皇甫康子

2018年2月号に最終回を迎えた連載「なんじゃ・カンジャ・言わせてもらえは」の執筆者、皇甫康子さんの新しいコラムです。皇甫さんの想いとメッセージがイモヂョモ（あれこれ）詰まったコラムをどうぞ。

ある日の昼休み、MBCの社屋で「社長は出ていけ！」と大声で叫ぶ自分の姿をスマホで生中継するプロデューサーがいる。たった一人のアクションが本館ロビーでの何十人もの自撮りライブへとあつという間に広がる。「いま闘っている人を孤独にだけはだめだ。それが闘いの重要な原則だ」と訴えるMBC労働組合の委員長もその中にいた。

公共放送のKBSと公営放送MBCの労組は賃上げのためのストライキが一度もない。「放送の公共性と報道の独立性を壊し、市民ではなく政権に奉仕するニュースをつくれ」という社長の退陣を要求するためにストをした」と語るKBSの委員長。「MBCは放送界で最初に労組ができた。1987年だ。当時軍事独裁政権下で民主化のために立ち上がった『六月民衆抗争』のことをMBCはきちんと放送せず、現場の市民から石を投げられた。その反省から、制作の自由を守り、公正な報道を要求するため労組を結成した」と語るMBSの委員長。韓国の言論人たちは、全国言論労組として横断的に連帯し闘ってきた。

2008年、米国産牛肉の輸入問題の報道により李明博政権が大打撃を受けたことから、本格的な言論統制がはじまった。KBSがまずターゲットになり、社長が解任される。次に2010年、MBCもトップが入れ替えられ占領される。放送検閲という最悪な状況下、299人が死亡、5人が行方不明となった大惨事、「セウォル号沈没事件（2014年）」で「全員救助」という歴史的な誤報をしてしまう。そして、朴槿恵前大統領退陣の原因となった「崔順実ゲート事件（2016年）」の真実を隠蔽しようとするなど、政治権力の「宣伝広報」に転落していった。

KBSやMBSが取材しようすると、「真実を報道しない放送局なんかいらぬ。帰れ！」と市民からの叱責が飛ぶ。しかし、労組のストを応援し、言論弾圧による解雇や懲戒をうけた記者やPDで2013年に設立された、調査報道を専門とする「ニュース打破（ダバ）」の会員となり、年間約5億円の会費で独立性を確保した報道を支えているのも市民だ。

画面に吸い寄せられたままの105分だった。そして、政治犯を政府がねつ造していく事実を告発した映画「自白」の中に、40年ぶりに無罪判決を勝ち取った「在日」の元政治犯たちの姿を見つけた。「1978」を含め、必見の映画だ。

センター設立25周年 事務局長からのごあいさつ

「多様な人が出会い、支え合う＆学び合う拠点として」

今から25年前、豊中市北桜塚の住宅街にとよなか国際交流センター（以下「センター」という）が誕生しました。これは「豊中市に国際交流の拠点が必要だ！」という市民の声を受け、市が建設したものです。同時期に、とよなか国際交流協会という組織も設立され、それ以来、センターの運営は当協会が行っています（2011年から指定管理者）。

2010年、センターは阪急豊中駅前のエトレ豊中6階に移転しましたが、今も多文化共生・国際交流の拠点として年間8万人超の市民（うち40%は外国人市民）が利用し、活動する施設となっています。また、センターは市民活動の紹介ポスターやセンター事業の写真や展示物、キャラクター、情報誌やチラシなど、様々な想いで彩られています。この12月にはふらっと訪れた人も楽しみながら多文化に触れてもらえるように「ワールドクイズ」の常設を開始しました。

これからもセンターがただのハコにならないように、様々な想いと活動をいっぱい詰め込んでいきます。みなさんもぜひ、ハコの中身をのぞきにきてください！（協会事務局長・山野上隆史）



休館日に職員でハイキングに行きました。
あけび採りに挑戦！

市長・副市長からの メッセージ

とよなか国際交流センターには、2018年11月に設立25周年を迎えました。今回は25周年を記念して、豊中市長・副市長より、とよなか国際交流センターにメッセージをいただきました。



豊中市長 長内 繁樹

明けましておめでとうございます。

平素は、市政各般にわたり温かいご理解とご協力をいただき、とりわけ多文化共生の推進に格別のお力添えを賜り、厚くお礼申しあげます。

昨年、とよなか国際交流センターが設立25周年を迎えました。本センターは、豊中から世界と未来へ国際交流の新たな波を発信することを目的に、市民文化の交流の場としてスタートしました。以来、国際交流活動や多言語での相談窓口、外国人のための防災フェアなど、外国人に寄り添った活動が行われてまいりました。ご尽力いただきました関係者の皆様に改めて感謝申しあげます。

本市は、今後もセンターを通じて、世界の文化に触れ、お互いを理解し、尊重し合えるような「教育文化先進都市とよなか」の実現に取り組んでまいります。

皆様には、引き続き、ご支援ご協力をお願い申しあげますとともに、新しい年が素晴らしい年となりますようお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。



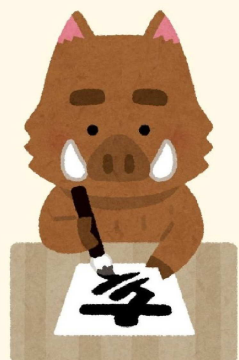
副市長 足立 佐知子

とよなか国際交流センターが設立して4半世紀、「25周年」おめでとうございます。

「国流（こくりゅう）」とはいろいろな事業と一緒にさせていただきました。特に印象に残っているのは、10年前、私が千里コラボのセンター長だった時のこと。毎週土曜日、外国人の親子が集うイベントを協働で開催しました。多言語絵本の読み聞かせ、料理やダンスの教室など、外国人と日本人親子が多数参加されました。みんなで楽しく話しをする中で、国流の職員さんが参加者の困りごとをさりげなくキャッチし、必要な情報を提供し、相談窓口につないでいるのを間近に見て、感銘を受けたことを思い出します。

あれから10年、国流はいつ行っても、誰にとっても居心地のよい、ありのままの自分でいられる場です。それは熱い思いと高いスキルをもったスタッフのみなさん、そして利用してくださる市民の方々のおかげです。

これからもずっと「みんなの国流」であることを願っています。



とよなか国際交流センターおしらせ「こくりゅうだより」第117号(2019年1月号)

発行元・問い合わせ:(公財)とよなか国際交流協会

〒560-0026 大阪府豊中市玉井町1丁目1-1エトレ豊中6F 阪急宝塚線豊中駅すぐ

開館時間:9:00~21:30(貸室受付は20:00まで、水曜・年末年始12/29~1/3休館)

TEL:06-6843-4343 FAX:06-6843-4375 E-Mail:atoms@a.zaq.jp

WEB:<http://www.a-atoms.info/>



SNSも随時更新中!

「とよなか国際交流センター」で検索!

多言語情報も
配信しています!

